

何が見えるか

[聖書] エレミヤ書 1 章 4～13 節

主の言葉がわたしに臨んだ。「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し／諸国民の預言者として立てた。」わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ／わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」と主は言われた。主は手を伸ばして、わたしの口に触れ 主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。見よ、今日、あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し あるいは建て、植えるために。」主の言葉がわたしに臨んだ。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンド(シャーケード)の枝が見えます。」主はわたしに言われた。「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと見張っている(ショーケード)。」主の言葉が再びわたしに臨んで言われた。「何が見えるか。」わたしは答えた。「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています。」

[序] 国が滅びる時代に

私たちは、6月から4ヶ月間、旧約聖書の出エジプト記(紀元前 1300 年頃のこと)を学んできましたが、今日から 2 か月間はエレミヤ書を学びます。預言者エレミヤは、南王国の都エルサレムから北東 5～6km 離れた小さな村アナトに暮らす祭司ヒルキアの子です。北王国がアッシリアに滅ぼされてから約 68 年後の紀元前 650 年頃に生まれたとされています。そしてヨシア王(BC640 ～ 609 年)の治世第 13 年(628 年)に神から預言者に立てられました。大予言者イザヤより 114 年程後輩ですが、しかし釈迦よりも 100 年近く昔の人です。聖書の世界は仏教よりもずっと古いのですね。

1章3節によりますと、彼はゼデキヤ王の治世 11 年(587 年)にエルサレムの都がバビロンによって落城して南ユダ王国が滅び、主だった人々が捕囚となりバビロンに連れて行かれる迄、預言者の活動を続けたとあります(1:3)。しかし実際はその後エジプトへ連れて行かれ、そこでも予言活動をして死にました(42:6)。国が滅びる激動の時代に 50 年近く神に用いられた預言者です。

[1] 何が見えるか

エレミヤの冒頭の言葉に注目しましょう。「主の言葉がわたしに臨んだ。わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」

この私は偶然にこの世に生まれて、今生きている者なののでしょうか？居ても居なくてもかまわない者、つまらない存在なののでしょうか？こんな者でも親が懸命に愛し、育ててくれた、だからくだらない

生涯を送っては申し訳ない、せめて親の恩に報いなければ、と生きる意義を説く人もいます。

違います。私は偶然この世に現れたわけではありません。私を形造り、誕生させ、この世で生きる者にして下さったお方がいらっしゃる。世界の創造主、歴史の支配者である神が居られる——これが聖書の信仰です。

私を母の胎内に宿し、形造り、育て、この世に誕生させた神は、私の生涯にご自分の計画、期待を託して、私を誕生させて下さった。私は神の期待を担って今を生かされている——これが青年エレミヤが聞きとった神の言葉、「母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」だったのです。ではエレミヤはこの召命を何時、どのようにして明確に受け取ったのでしょうか。内村鑑三はエレミヤを「余の特愛の預言者」と呼んでいます、こう推測しています。「多分、青年エレミヤがアナト付近の郊外を独り歩みし時、あるいは古きオリーブ樹の下に独り黙想にふけりし頃、彼の心琴に幾度となく触れし、細きかすかな声があったろう。彼は幾度となく打消さんとせしが、しかしその声は去らなかった。彼は遂に、自分が預言者として神の予定されし者であることを、信ぜざるを得ざるに至ったのであろう」。

内村がこの様に自然を逍遙する青年の姿を推測したのは、1章 11～12 節の言葉によると思われる。「エレミヤよ、何が見えるか」。わたしは答えた。「アーモンド(シャーケード)の枝が見えます」。「あなたの見るとおりだ。わたしはわたしの言葉を成し遂げようと見張っている(ショーケード)」。

「アーモンド(シャーケード)(口語訳では「あめんどろ」)は、パレスチナではすべての木に先駆けて 1 月の終わりか 2 月の初めに花をつける木です。私たちが長く暮した北海道の札幌でいえば、雪がまだ積る 3 月末に、山の麓に咲くコブシの花にあたるでしょうか。万物が眠っている真冬のさなかに、早くもあざやかな花を咲かせる準備を始める木の細い枝に現れる変化に、エレミヤは注目し、観察していたのです。

混沌とした歴史の中で、神が独りご自身の裁きと救いの御業を行われる時期を見計らっておられます。神は自然の変化を鋭く観察している青年エレミヤに注目しておられます。そして御自分がこれから成し遂げようとしていることを、この若者にお示しになったのでした。再び神は言われます。「何が見えるか」。エレミヤは答えました。「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています」。これは、北の強大な国の攻撃によって、南王国も滅ぼされる災いが襲いかかってくるという予告でした。

[2] 危ないです

私や山下先生、喜美子や伊藤三恵子さんは、若いときに目白ヶ丘教会で熊野(ユヤ)清樹牧師の説教を聞いて育ちました。先生は色々なエピソードを説教の中で繰り返し語られました。「もう何回目だと指折り数える人も居るだろうが」とおっしゃりながら語られましたから、今でも鮮やかに甦ってきます。そのなかの一つです。

先生が熊本県人吉の小学校時代のこと、習字の時間に各自で練習している間 受持ちの先生は、柱によりかかりながら外を眺めていました。突然一人の子を 呼んで窓のそばに立たせ「何が見えるか」と尋ねました。その子は首をかしげる だけでした。「もうよい。席に戻りなさい」。次の子が呼ばれました。「何が 見えるか」。その子も首をかしげるだけでした。

子供たちは俄然興味をそそりました。幾人目かに「熊野」と呼ばれました。先生の傍らに立って外を眺め渡しました。「何が見えるか」。いつもながらののどかな田舎の風景です。特別変わった様子はありません。ところが校庭と地続きの農家の縁先で、子守さんが赤ん坊を抱きながら、こくりこくりと舟をこいで居眠りをしているのに気付きました。赤ん坊を縁先から下に取り落としたらケガをします、「先生、危ないです」「そうか、行って起こしてきなさい」。熊野少年はとんで行ってその子守さんを起こして、教室に戻って来たそうです。

「何が見えるか」「先生、危ないです」「そうか、行って起こしてきなさい」。皆が皆、危ないと気が付くわけではありません。ですから危ないと気付く心は、神さまからその人に与えられた賜物(gift)ではないのでしょうか。あめんどうの枝を見ながら預言者に召されたエレミヤと神との会話に重なるお話ですね。

熊野先生はお父さんを早く亡くしたので、中学校に進まず高等小学校を出て、内務省の衛生試験所で働き始めました。しかし試験管をふるっている毎日の生活が、何か他人の仕事をしているような気がして、仕方がありません。「自分で なければならない仕事があるはずだ」。こうして牧師になる道を神さまから示さ れて、東京に出て中学2年に編入し、神学校への道を歩み始めたのでした。

「ああ、わたしは若者にすぎませんから」と尻込みするエレミヤの中にも、既に生まれる前から、「シャーケード」から「歴史を見張っている神の眼差し・シヨ ーケード」に気付く賜物が、授けられていたのでした。主は手を伸ばして、エレミヤの口に触れ、言われました。「見よ、わたしはあなたの口に言葉を授ける。見よ、今日あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」。

神からこう言われてしまうと、エレミヤは返す言葉がありません。小さな村の祭司の息子です。どれ程の学歴の持ち主か。都の神殿や王宮で語るとすれば、貴族出身のイザヤとは違い、軽くあしらわれる惨めさを味わうでしょう。彼の尻込みも当然でした。

ところが神はおっしゃいます。「わたしがあなたを誰のところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」。そうです。何を語るのか。自分が考えたことを語るのではありません。神が語れとお命じになる言葉をそのまま語ることが、預言者の任務なのです。

混沌とした時代の流れのなかで、ただ自分の思いのみで安楽に毎日を送っている多くの人々。神はどのように歴史を導こうとしておられるのか、その言葉を語る預言者の言葉に聞き従うことこそが、私たち人間にとって最も大切ではないでしょうか。

[結] 聖書から神の言葉を聞きとる

日本が戦争に負けた時、学校で教科書の間違いを、先生の指示に従って習字の墨と筆で、黒く塗りつぶす作業をさせられました。こんなに間違っていたことを学んでいたのかと、愕然としました。時代が変わろうと墨で消されることのない、本当の真理を学ばなければならないという思いが、心の底からふつつつとこみ上げてきたことを、今でも忘れません。

軍人になって天皇陛下に命を捧げるといふ人生の目的を失い、新しい目的をつかもうと、本を読み漁りました。「日本は聖書に負けた」という言葉を読んで、聖書を手に入れました。しかし分からないことだらけ。友人が通う教会・目白ヶ丘に連れて行ってもらいました。説教を聞きながら聖書を読んでいくうちに、私に対して神が呼びかける言葉として、聖書に向かい合うようになりました。聖書から神が私に語りかけておられる言葉を聞き、神の御心に従って生きる信仰を与えられました。神は、私を牧師にお召しになりました。

どう生活したらよいか迷う時に、私たちは正しい判断を示す言葉を必要とします。その言葉を聞いて考え、自分の言葉で語ることで自分のものになっていきます。そして言葉で決意を表明し、行動を起こします。このように言葉で私の人格が形成され、言葉で私の生き方が綴られていくのです。人間の言葉を聞くことによってすら、私たちは人間として成長していくのですから、神の正しい命の言葉を聞くことが、私たちにはなおさら大切ではないでしょうか。

私は聖書を読みながら、今どう生きるべきかを示す神の言葉に聞き従う生活を続けて今日に至りました。本当に幸いな人生を歩んで参りました。聖書から聞きとる神の言葉を皆さんに取次ぐ牧師の務めを長くさせていただいておりますことを、心から感謝しています。

「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」とエレミヤに語られた神は、皆さんお一人ひとりにも語りかけておられるのです。

皆さんは、その語りかけをお聞きになっていませんか。今日どうすることが、神の御心でしょうか。どちらを選ぶべきか、自分の役割は、何をなすべきか等を、聖書を読みつつ、祈って御心を聞いて参りましょう。神の霊、聖霊が私の心に働きかけて、神の言葉を示して下さいます。私たちの人生の違い——それは一人ひとりに対する神の期待、ご計画の違いです。貴方でなければならない仕事、貴方にして欲しいと神が願っておられる任務を、各自が信仰をもって聞きとり、神の御心にあるご計画を、実現させて参りましょう。

祈ります:神さま、今日も私たちを礼拝にお集め下さって、有難うございました。あなたを賛美し、祈りを捧げ、エレミヤ書を通して、あなたのみ言葉を聞きました。内気な若者エレミヤに、あなたは国が滅びるといふ深刻な裁きの言葉を語らせました。それゆえに彼は人々から嫌われ、迫害され続けました。そして、遂に国が滅んでしまいました。耳障りな言葉は誰からも嫌われます。でも私たちには、あなたの厳しい言葉が必要です。あなたの裁きの言葉を聞き、悔い改める心をお与え下さい。そのために聖書を読み続け、真剣に礼拝し続ける者にして下さい。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン